

「茶旅」

”ごぼればなし“

(44)

九州茶の恩人 可徳乾三について(1)

コラムニスト 須賀 努



2年ぐらいい前、佐賀の和紅茶専門店紅葉（くれは）の居心地の良い古民家で紅茶を飲んでいる時、店主の岡本さんに『可徳乾三って、知っていますか？明治期の九州紅茶の祖ではないかと思われる人物のようですが、どんな人だったのか、知りたい』と突然言われたことがある。

なぜ彼がそれを筆者に話したのかと思ひ、僅かしかない資料を読んでみると、明治時代の紅茶製造の第一人者であると言われており、九州熊本出身で、日本のみならず、中国、ロシア、モンゴル、台湾と実にダイナミックに活動した人だから、茶旅に重なるものを感じたのだと分かった。もし詳細が分かれば『九州茶の大恩人』ではないかと

の予感があった。ただその時はそれ以上皆目見当がつかず、そのまま時が流れた。

折に触れて気になっていた可徳の情報が少しずつ集まり始めたのは昨年後半から。彼の出身地である熊本県合志市（当時は合志村）の上田欣也市議員からご連絡があり、先日そのお墓にご案内頂き、『可徳』という極めて稀な名字の墓石が並んでいるのを見て、圧倒された。更には貴重な資料を頂戴して、可徳の略歴を簡単にまとめる所までようやく漕ぎつけた。

可徳乾三は1854年合志村の農家に生まれる。合志は土地が痩せており、地元外に活路を求めざるを得ない場所だった。父庄吾は日本の将来は養蚕と

茶業だとの信念から、長男に農業を継がせ、次男に養蚕、三男だった乾三に茶業を学ばせる。1874年日本で最初に出来たと言われる熊本山鹿の紅茶伝習所に入り、清国人から紅茶製造を学ぶがこの清国人は安徽出身で緑茶専門だったようで、製造は失敗した。しかしその後1876年には熊本入吉、その翌年には高知でも紅茶伝習所に入所、1878年には県内で紅茶製造を指導するまでになっていた。

因みに当時の紅茶伝習所がどのようなものであったか知りたいと思ひ、熊本入吉を訪ねてみたが、現在ではほぼ資料は残っていないとのこと、地元の人もそのようなものがあつた事すら聞いたことはないという。山鹿、高知に問い合わせてみても、答えは同じであり、日本茶の歴史における紅茶の役割・比重がよく理解できる結果となつてしまつている。

その後製造だけでなく紅茶販売のために熊本で不知火社を設立、そして横

浜では日本紅茶直輸会社の設立に係り、茶の商売に乗り出したが、当時勃興してきたインド・スリランカ紅茶との競争に敗れ、財産のほとんどを失つてしまつたらしい。それでもめげずに、1887年には官費留学生として中国の漢口に渡り、当時ロシア向けに作られていた中国風紅茶の製造法を学んで戻つた。『袋踏法』という製法を編み出し、これが日本の紅茶製造を広めたともいうが、それがどのようなものだったのか、詳細はよくわからない。

帰国後可徳は、二元農商務省次官で九州の茶業に目を付けていた前田正名の呼びかけで九州茶業会に加わつて活動の幅を広げる。また熊本県は県内にあつた豊富な山茶を利用して、中国風紅茶及び磚茶製造を奨励し、伝習所を通じて農家に広め、その費用補助も行ったという。

1896年にはその九州茶業会の委嘱を受けてシベリアでの販路調査のため、同じ熊本県人の中川正平、阿倍野

利恭らとウラジオストック、ハバロフスク、ニコライエフスク、イルクーツクなどの各都市を視察した。ロシアは自国にはほぼ茶園を持たない、世界でも最大級の茶葉消費国であり、常に茶葉輸出の一大市場と目されていた場所である。清朝が弱体化したその時、日本からの茶葉、特に中国風紅茶及び磚茶輸出に商機を見出したのであろう。



写真：熊本県合志市の可徳家墓地

尚中川正平は可徳同様、初期に紅茶伝習所で紅茶製法を学び、紅茶輸出では可徳のパートナーとなつてシベリア市場開拓に努めたほか、緑茶製造にも力を入れ、国内の製茶品評会で度々入賞するなど、熊本茶業の恩人と呼ばれ、後世に名を遺した人物である。

更に可徳は1898年には再度自費でロシアに渡り、シベリアからモンゴル一帯を巡り、紅茶や磚茶の売り込みを図り、成果があつたと言われている。この時茶業組合中央会議所からウラジオストック出張所常務員を委嘱され、出張所を開設、国産紅茶の販路拡大に大いに努めている。この頃には既に可徳乾三の名は日本茶業会に響き渡り、静岡のアメリカ力向け緑茶に対して、アジア大陸向けの九州紅茶が勃興していった。東の大茶商、大谷嘉兵衛と並び称されることすらあつたという。まさに可徳は明治期の九州茶を支えた人物であつた。

(すが つとむ)